

佳作

気づかなかった父の思い

静岡県 御殿場南高等学校二年 勝又 亜沙美

私は大学に行きたいと思っている。そう強く思うようになったのは、高校二年生のこの夏からだ。

それまでは、(私の進路はどうなるのだろう。大学を目指すのか、それとも就職するのだろうか。)とぼんやり考えるだけだった。考えるというよりは、悩んでいたという表現の方がよいだろう。別になりたい職業が無いわけでもなかった。進学校に来たのにそれで悩んでいたのは、ある理由があった。父が、私の大学進学に反対していたのである。

高校受験の時、今の高校を希望していることを父に伝えた。父は静かに聞いてきた。

「大学に行くのか?」

希望していた学校は進学校で、大学に行く為に勉強する、という雰囲気だった。だから父はそう聞いてきたのだろう。

しかし、その時私はまだ大学のことなど深く考えていなかった。中学生のときもなりたい職業はあったが、具体的にどういう道を進めばよいか分からず、高校に行けば分かるのではないかと思いつく学校のなかでは偏差値が高めのこの学校を選んだのだった。だから父の問いにははっきり答えられず、ただ、

「分からない。」

とだけ言った。その時の父が少しだけ怖くて自分の思いを全て伝える気になれなかった、というのもある。

高校に入学しても父の考えは変わらず、私は困った。学校から進路希望調査の紙が来る度に、どうしようと悩み母に相談した。

「行きたい所を書けばいいんじゃない。」

母は理解があったのでそう言ってくれ、私も不

安を抱きながら、希望していることを素直に書いた。

そして二年生になって急に焦りを感じた。先生たちは大学を決めろと言い始め、希望調査の紙にはもう大学名を書かなくてはいけなくなり、周りの友達には大学を決めた、という人たちも出てきた。あれから父とはあまり大学の話はしていない。きつと反対していると思ったからだ。私は高校生活を一年して大学についてよく考えるようになっていた。

夏、学校からの課題ということもありオープンキャンパスに行くことになった。父には出かけてくる、とだけ伝えた。多分、父は知っていたと思う。

オープンキャンパスは私の大学への思いをさらに強くさせた。ぼんやりとしていた輪郭がはっきりとした感じだった。

夜、父が私に話しかけてきた。

「どうだった?」

(やっぱり知ってたんだ。)まずそう思った。

ひかえめに感想を言っていた。私はまだ、父は反対していて、キツイことを言っていると思っていたから。父は、言った。

「父さん、お前が行きたい大学、行けるように仕事頑張るから。」

一瞬、頭の中が白くなった気がした。(何だった?) 私はその言葉をすぐに受け入れられなかった。誰がそう言ってくると予想できただろう。「どういう方に進みたいんだ?」

父さんはさらに聞いてきた。進みたい方向も話していないかったことに気づく。私は美術系の大学へ行きたかったが、父が受け入れてくれるとは思わなかったので素直に言うか言わないか悩

んだ。母に目を向けると、（言ってみたら。）という目で返してきたので、意を決し言った。

「だったら、東京芸術大学は？」

父は否定するどころか大学名まで出してきた。（本当にあの父親だろうか？こんなこと言ってくれるなんて、信じられない！）私は混乱した。あんなに（行かせない。）という雰囲気だったのに、どうしたんだ、と。

しかし、私は嬉しかった。目標としていた職業に一步近づいた気がした。それは本当に小さな一步だが、私にとってとても大切なものだった。心の中でありがとうと思ったが口には出せなかった。なんだか恥ずかしくて。経済的なことを考えると、さらに感謝の思いが強くなる。アルバイトもしていない私は親に頼るしかない。以前、

「そのことは気にしなくていい。」

と母に言われて、嬉しいような、悪いような複雑な気持ちになったが、そこで感じたのはやはり感謝の思いである。

父と話してから、これからどう過ごしていくか考えた。もう、今までとは違い、目の前にはしっかりとした目標ができた。周りの人たちの中には受験を本格的に考え始め、勉強をする人もいるのだろう。私ももう、ゆっくり考えている時間はない。これからは、頑張るしかないのだ。高校生活後半は厳しいものになりそうだが、くじけず、あの日の父、いつでも理解してくれた母を思いながら努力の日々を過ごそうと思う。